

氏名(国籍)	陳 敏 齡 (台湾)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2185号		
学位授与年月日	平成18年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	中国の弥陀論		
主査	筑波大学教授	Dr.Phil,博士(文学)	佐久間 秀 範
副査	筑波大学教授	文学博士	佐藤 貢 悦
副査	筑波大学助教授	Dr.Phil	小野 基
副査	東京大学大学院人文社会系研究科教授	博士(文学)	末木 文美士

論文の内容の要旨

論文の全体は、四章から構成されている。

第一章は、弥陀思想に関連するインド的源流を探求する作業で、四節で構成されている。

第一節の〈超越的仏陀への探求〉では、仏陀観の全体から、永遠性と普遍性を象徴する大乘仏陀－いわば法身仏－の原型である可能性を提起している。つまり法身弥陀という概念が本研究の着目点と言える。その具体的考察として、阿弥陀仏(身)(第二節)と極楽世界(土)(第四節)の両方から法身弥陀という概念の根源性を追究している。

そして、第三節の〈阿弥陀仏と十方仏〉では、こうした法身弥陀の概念に基づいて、弥陀と三世十方仏との内在的相関関係を考察している。ここで示された視点を基準として、第二章から第四章で天台・華嚴・善導の三系の弥陀観を論じている。

本論文では、一般に用いる浄土三系－慧遠流・善導流・慈愍流－の説を取らずに、中国仏教の文脈から天台浄土系、華嚴浄土系、善導流浄土系という分け方を提起しており、これは陳氏の真骨頂である。この分け方を採用する根拠は、中国仏教において、隋唐の宗派仏教の形成する前に、南方の真空妙有と北方の真常唯心という二つの流れがあり、南方の真空妙有の思想は天台宗によって大成したが、北方の真常唯心の思想は華嚴宗によって大成された事による。また、一般の宗派という「宗」を使わず、その代わりに広い意味としての「系」を採用し、それを廬山慧遠を天台浄土系、地論師を華嚴浄土系、それぞれに当てはめている。

第二章〈天台系の弥陀論〉は、三つの節よりなる。

第一節の〈廬山慧遠における法性常住の弥陀〉では、まず廬山慧遠がいかに般若空から法性へと展開するかを論じている。その内容は、インド的空への理解不足というより、むしろ究極的実在に対する中国的思弁の典型だと陳氏は評価し、中国における「自性弥陀」の先駆とも言っている。

第二節の〈智顛における一心三観の弥陀〉では、智顛の法華仏における三身即一の仏身論を基盤に、『法華文句』と『維摩經文疏』の弥陀観を具体的に提示し、一心三観の観点より、即一土即四土あるいは三身即一の弥陀論の説に筋道を付けている。

第三節の〈知礼をめぐる天台山家派の尊特身の弥陀〉には、知礼がいかに智顛の「一心三観」の説を継承

しながら、『大乘起信論』の本覚始覚説をもって天台の「一心三觀」としての心の主体性を發揮したかを論じている。

第三章の〈華嚴系の弥陀論〉は、三つの節からなる。

第一節の〈地論念仏者における三身即一の弥陀〉において、浄影慧遠、道闇、靈裕を例として取り上げている。浄影慧遠には往生の事蹟はないと見られるが、彼の弥陀身土の理論は常に浄土門と対蹠する聖道門の代表と見なされている。彼は実に『無量寿經』の弥陀を法身と位置付けており、道闇と靈裕も同様に、法界遍満の盧舎那仏を前提として、三身即一の法身弥陀を強調している。

第二節の〈智儼における一心法界の弥陀〉において、智儼がいかに一乘別教の立場から弥陀浄土を位置付けているかを論じている。智儼は弥陀浄土を蓮華蔵世界への「初門」と言いながら、「終極入宅」という終極点とも位置づけている。又、智儼の「化者は報化、非化身化」の説と道綽の「報化仏」説との関係も注意すべきものである。

第三節の〈澄観における顕密合一の弥陀〉において、澄観がいかに顕密浄土を融合し、弥陀の奥義を詮釈するかを論じている。澄観は「入法界品」の翻訳に関わり、しかも『華嚴經』の注疏をも書いている。従って、華嚴と浄土との統合において澄観の果たした役割は見逃せないものである。

澄観の独特な点は伽耶成道の釈迦即華嚴遮那、華嚴遮那即密教の大日如来という論理を述べたことにあり、特に後者は澄観が新しく導入した密教の説である。澄観は最終的に華嚴遮那と阿弥陀仏とが同一の根源性をもつということに達し、法身弥陀と結論づけた。

第四章は善導流浄土系の弥陀論を考察である。

第一節の〈曇鸞における二種法身の弥陀〉では、曇鸞の様々な二身説が龍樹の思想を受けながら、世親の法身等流の深義を一層展開するものと指摘している。従って、曇鸞の弥陀論には、浄土の因行よりむしろ弥陀の果徳を重んずるという如来蔵思想の傾向が強い。つまり曇鸞がいかに弥陀の本願力を重視して、他力的救済の浄土門を建立してゆくかという理由も追求している。

第二節の〈道綽における浄土の報身弥陀〉において、道綽『安樂集』を中心に報仏報土説の由来を考察している。道綽は伝統的三身説における「浄報穢化」の原則に沿って弥陀の報身報土説を提起することで有名だが、彼の独特な点は、二諦義に基く二身の中の一つとしての「報化仏」を説くのである。道綽の意図は、報化仏のタームで、報・化のいずれも絶対眞実から流出する意味を表すことにある。そこには世親→曇鸞の法身等流の思想が底流を貫いていると思われる。

第三節の〈善導における是報非化の弥陀〉において、善導の弥陀論を、三身別体の報身弥陀と三身同体の法身弥陀との両方に分けている。三身同体の説からは法身弥陀が導かれ、三身別体の弥陀論は、弥陀の救済論を成立させるので、彼の報身弥陀説も弥陀の仏としての法性の根源に還ることになる。

全体として、善導系浄土教の弥陀論は法身等流の如来蔵思想との関わりが深い。したがって、こうした報身弥陀説は総じて、法身垂報の弥陀論とも言える。

以上の考察に基いて、陳氏は次の二つの結論に達している。

第一に、中国仏教において、弥陀に関する三一論争は常に二分されるが、諸文献を精査すると聖・浄二門の諸論師には共通のパターンが見出され、天台・華嚴・浄土三系のいずれも、三身の相対概念を超えた絶対的な法身の概念に至るとのことである。

第二に、中国仏教における弥陀への探索は、『般舟三昧經』『観經』にみられる唯心思想に深く関わっており、こうした主体的な心を軸に、弥陀は次第に内在化して、自己の仏性の再発見と結びつくことになる。言い換えれば神秘体験の中で、弥陀の他力に包まれることになる。このように中国における弥陀の救済の特色を理解するためには、如来蔵思想の両義性－内在的超越と外在的超越－を常に念頭に置く必要がある。

審査の結果の要旨

中国浄土教の研究は必ずしも少ないわけではないが、ほとんどが宗門からの宗学的研究であり、曇鸞・道綽・善導を正統とし、それが日本の法然・親鸞に継承され、真意が発揮されるという前提のもとに研究されている。中国浄土教の展開をそれ自体として研究する方法は必ずしも定着していない。いまだに望月信亨『中国浄土教理史』が、中国浄土教全体の流れを捉えたもっともすぐれた研究であり続けているのが現状である。個別的な研究はあっても、それを捉える枠組みが検討されていないのである。

その中で、陳氏の研究は、「伝統的な文献学の研究と現代の宗教学の方法を援用」することにより、「阿弥陀仏の原型及び宗教的本質の解明を目指す」という大きなスケールで研究を展開している。その対象となる範囲は、インドにおける浄土教の起源から出発し、中国浄土教に関しても、天台系・華嚴系・浄土系という三つの系統を分かち、それぞれについて、仏身論という観点から阿弥陀仏の位置づけを検討している。

細かい部分的な問題はさておいて、全体的に本論文の大きな成果としては、以下のような点が挙げられよう。

第一に、中国浄土教を天台系・華嚴系・浄土系の三つの系統に分けたことが注目される。これは実証的な成果というわけではなく、むしろ見通しの立て方であるが、従来のように、浄土教を曇鸞・道綽・善導の純粹浄土教とそれ以外の傍系に分けるような単純な分け方に対して、より適切に流れが捉えられるようになった。もちろんこれでも十分なわけではなく、なお検討すべきさまざまな問題はあがるが、それでも従来の類型論に較べて大きな進展といえることができる。

第二に、それと関連して、具体的には、特に天台系・華嚴系に関して比較的詳しい検討がなされていることが注目される。例えば、天台系で、智顛について、仏身観の総体から弥陀観を見ようとしている点、華嚴系で、後の唐代華嚴が確立する以前の資料を検討している点、智儼・澄観を浄土教という観点から詳しく検討している点など、それぞれ個別的に独立した論文としても十分に読み応えのある内容となっている。

第三に、このように従来の日本の宗学的な立場から自由であることにより、曇鸞・道綽・善導という、陳氏の言う「浄土系」に関しても、興味深い示唆が見られる。例えば、善導における如来蔵思想との関連など、注目される指摘である。

第四に、仏身論という観点から阿弥陀仏の位置づけを見るとき、従来の常識的な見方では、善導において報仏説が確立したのに対して、天台系などでは応身説を取るというように、インド以来の三身説を基準に考えられてきた。それに対して、陳氏は天台系や華嚴系の文献に即して検討し、三身説では収まらないさまざまな仏身の位置づけがなされていることを明らかにした。

第五に、第四と関連することであるが、これまでの一般的な解釈では、阿弥陀仏は諸仏の一であり、中国においても、善導系を除けば、天台や華嚴では低く位置づけられていたと見られている。それに対して、陳氏は関連する文献を検討し、阿弥陀仏が必ずしもそのように低く見られていたわけではなく、むしろ諸仏を統合する根源仏的な位置づけを与えられていることが多いことを明らかにした。

以上のような諸点は、本論文の大きな成果であり、高く評価できることである。他面、欠点を挙げるとすれば、最大の欠点は、きわめて大きなスケールで図式化しようとしているため、いささか図式が粗くなり、それぞれの箇所を取れば、異論が出てくる余地が大きい。例えば、天台系に関して言えば、智顛からいきなり知礼に飛んでよいのか、唐代の天台偽書の浄土教関係書や湛然についても検討が必要であろう。華嚴系で言えば、法蔵はどうなるのか、など疑問が湧く。その他、例えば、インド関係のところなど、インド仏教の専門家から見れば、いろいろと問題が指摘されるであろうし、西洋哲学の概念との比較などにおいても、厳密に考察された上での論述とはいえないので、当然西洋哲学の専門家からの異論は出るであろう。以上のような欠点があることは勿論認めなければならないが、それらの欠点を超えて、今日の学界にもたらす成果は

大きいと考えられる。今日の日本の仏教学界は研究が細分化されて精密化されてきているため、ともすればそれを見通す大きな図式を見失いがちである。そのような中で、図式そのものを問い直し、構築しようとする本研究が投ずる波紋は、国際的な規模で考えても、大きなものがあるであろう。

今回陳氏が選んだテーマの範囲は広く、かつ視点とするものも多岐に亘るため、一般には大きな問題だけに目が向きがちであるが、上記に指摘したように、陳氏はしっかりとした見通しに基づいて個々の思想家や文献に新たな解釈を示しており、それぞれの章を個別の論文と見ても、新鮮な視点をうかがうことができる、極めて優秀な論文であり、十分に博士号に値する研究である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。